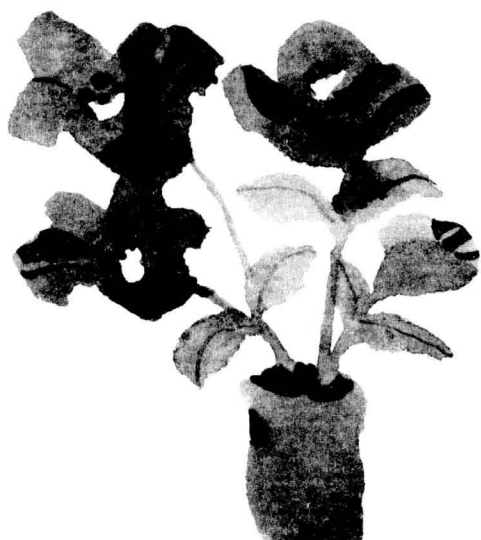


女の四季

女の四季

平岩弓枝



女の四季

九三〇円

昭和五十年四月三十日発行

著作者 平岩弓枝
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
本社 東京都新宿区西大久保三丁目
出張所 東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(二六)二五五〇

0093-752113-5170

無検印承認

女の四季

目次

秋の日

五

異母姉妹

三

嫁して十年

六

瘦梅記

七

女と味噌汁

二三

装幀
村上

豊

秋の日

1

授乳を終えて、英子をベビーベッドへ戻し、汚れたミルク瓶を台所で洗っていると、裏口から、母の戸美子が入って来た。

「いそいで来たんで、息が切れちゃったわ。お水、一杯ちょうだい」
草履を脱ぎながらいう。

「あら、すぐお茶をいれるわよ」

「それはそれ、これはこれよ」

娘の渡した水のコップを旨そうにあけて、

「英子ちゃんは……？」

「一日中、よく寝るの」

「寝る子は育つてね。夜泣きなんかしない」

「全然……」

「親孝行だね。お前もそうだったけど……」

奥の六畳のベビーベッドをのぞきに行った。それが楽しみで、このところ二日おきくらいに顔を出す。

「まあ、大きくなったこと……三日逢わない中に、見違えるようよ」

寝顔をみつめて、満足そうな祖母の声になっていた。

「三日ぐらいで、そんなに変わるかしら」

「変りますよ。このくらいの頃は毎日、毎日が大変な成長なのだから……」

久仁子は母のために、買いおきの上等の煎茶をいれた。久仁子も、夫の浩介も現代っ子で、コーヒーにはうるさいが、茶は番茶でも安物の煎茶でも一向に苦にならない。母の戸美子だけは静岡の茶問屋の娘で、茶にかけては一家言を持っている。だから、客用という名目で、上等の煎茶や玉露を久仁子が用意しておくのは、母への心づかいであった。

「今日は世田谷教室ね。土曜日だから……」

母がテーブルの脇においた黒い皮のバッグを眺めた。久仁子が結婚する前から、母が愛用している大型のバッグには、佐賀錦の材料や、図案を書いた紙などがぎっしりとつまっている。

「世田谷はらくなのよ。生徒さんがみんな古い人たちでしょう。放つといっても、みんながいいアイデ

イアを出してくれて、いい作品が出来るから……」

娘時代に趣味で習った佐賀錦を、母が本格的にやり出したのは戦後であった。ぼつぼつお弟子さんがふえていた頃に、佐賀錦のブームが起り、世田谷の神社の社務所を借りている世田谷教室のほかに、渋谷と丸の内にも教室を持つようになっていた。そのおかげで、六年前に父が亡くなってからも、母は父の残してくれた僅かな資産をあてにしないで生活が出来たし、久仁子の結婚にもかなり金をかけることが出来たのだ。

「どう、みてよ」

黒いバッグから、母が小さな手鞆を取り出した。佐賀錦の小さな布をはり合せて作った美しい手鞆である。

「きれいねえ」

「英子にね、作ったのよ」

「もったいないわ、佐賀錦の手鞆なんて」

「買えば高いかも知れないけど、端布をうまく利用したんだもの」

母が縁側の板の上で、ほんと打つと手鞆は軽くはずんだ。

「大事にしまっておくわ、鞆つきには惜しいもの……」

「今に、英子が大きくなったら、手遊びにさせてやってよ」

上品な配色の手鞆を、久仁子はしみじみと眺めた。母は端布と気易くいったが、これだけのものを作るのに、幾夜、母が背を丸め、眼鏡を直しながら仕事台に向ったことだろうと思う。

茶を二杯、喜んで飲んだだけで、戸美子は立ち上った。

秋に催している制作展が近いので、仕事がつまっているという。

「あんまり、根をつめないようにね。母さんだって年なんだから……」

母一人娘一人であった。ろくな親孝行も出来ないが、せめて長生きだけはしてもらいたいと思う。

「大丈夫よ。おかげでね眼は少し心細いけど、肩もこらないし、世田谷教室へ来ていた石川さんは、母さんと同じ年なのに、この春から、ずっと入院してね。血圧が高いらしいけど……もう、佐賀錦とお別れだなんて心細いこといつてゐるわ」

自分の元気なことが誇らしげであった。

「石川さん、いくつ……」

「ちようどよ。還暦のお祝いをしてすぐに具合が悪くなったのよ」

「還暦……」

はっとした。

「それじゃ、母さんも今年、還暦ね」

はじめての出産で、母の年のことをすっかり忘れていた。

「まあね。あたしは石川さんより、半年以上、下なんだけど……」

誕生日が十月であった。母は還暦などという年に自分になっているのを、いくらか恥ずかしがっているふうである。

「お祝いしなくちゃね」

「冗談じゃないわよ。還暦なんて、まだまだ女盛りなんだから……」

来た時と同じように、せっかちに母は帰った。

久仁子は、母の還暦の祝いの品物について、考えていた。誕生日には、いつもちょっとした品物をプレゼントしていた。還暦なのだから、いつもよりは気ばりたいと思う。

生活に不自由はない筈だが、決して贅沢に暮している母ではなかった。英子を産むまでは、久仁子も会社づとめをしていたので、自分の金があった。時々、おこづかいにと、母に五千円、一万円と渡しても、みんな久仁子の名前で貯金してしまっている。いくら、自分のものを買えといってもきかなかった。

そういうところは頑固である。

久仁子が市川浩介と知り合って、結婚する時もそうであった。浩介は三男だし、両親は佐賀なので、久仁子の母が同居することはかまわないといってくれた。どうせ、赤ん坊が出来るまでは共働きだし、留守番にもなって有難いから、といってくれたのに、母は最初から別居を主張してきかなかった。

「あたしも仕事を持っているし、一人のほうが気らくでいいのよ」

久仁子と二人で暮していたアパートに、そのまま居すわり、久仁子たちが今の新居を買うのには、浩介の実家から援助を受けた金よりも、戸美子が出してくれた金のほうがむしろ多かった。

「だもの、母さん、いばって同居すればいいのよ」

と久仁子が冗談めかして誘っても笑っていて相手にならない。

母のアパートと、久仁子たちの新居とはバスで停留所が三つばかりだったが、最初の頃久仁子は寂しかった。

恋愛結婚だった夫と一緒にいても寂しく感じることもあるのだから、母は一人でさぞと思うのだが、そうした娘の心配を、戸美子は笑い飛ばした。

「なに子供みたいなこといつてるのよ。母さんなんて、毎日が忙しくて、寂しがってる暇もないわ」
事実、戸美子の毎日は多忙らしくて、英子が産れるまでは、十日に一度ぐらいしか訪ねてくれなかった。久仁子のほうから訪ねて行きたくても、その頃は勤めを持っていたし、日曜日は夫婦で外出したり、一週間の滞った家事を片づけたりで、実際には全く実現しなかった。

母に還暦の祝物を贈るについて、久仁子はその金をどこから拈出するか、胸算用していた。英子を出産する前に、勤めのほうは辞めた。その退職金の大方は、クーラーの月賦や出産準備などに費ったが、いくらかは貯金してある。他にも、結婚後、生活費の中から、僅かずつでも将来に具えて月掛貯金をしていたが、そっちのほうは手をつけたくなかった。

浩介が帰ってくるのは、いつも七時から八時の間であった。営業だから、接待などで遅くなる日も週に何回もある。

その日の帰宅は七時すぎであった。

風呂も食事も済んでから、久仁子は夫に、母の、佐賀錦の手鞠をみせた。

「ほう、こりゃあ、立派なものだね」

浩介は手鞠を、久仁子の置いた位置のまま眺めた。

「子供の玩具にしては惜しいな」

「英子にとっては、おばあちゃんの形見になりますわ」

昼間、母から受取った時に、ふと感じたことが口に出た。

「まだ、そんな年でもないだろう」

「還暦ですって、今年……十月が誕生日なのよ」

久仁子は、さりげなく夫をみた。

浩介の口から、それなら、なにか祝ってあげるといい、といってもらいたかった。

「還暦にしては若いな」

夫は新聞を取り上げた。次の言葉を待っていたのだが、会話はそれとぎれた。

自分の口から、母にプレゼントを、といい出しにくかった。自分の退職金でなにかを買うのだから、かまわないようなものの、夫のほうから思いついてもらいたい気持が強い。

夫の両親には、暮にも盆にも、なにかと心がけて送っているが、誕生日までは手がまわらなかった。そこまでは余裕のある生活でもない。浩介の両親はどちらも還暦を過ぎていた。古稀には間がある。

何日か久仁子は、母の還暦祝のことを夫に相談出来ないですごした。浩介の帰宅が続いて遅かったせいでもある。

日曜日、浩介は客の接待でゴルフに出かけて行った。営業にいと、ゴルフは必修課目のようなもので、浩介も昨年あたりからぼつぼつ、練習場に通い、なんとかグリーンに出られるようになった。

もともと、スポーツ好きだから、上達も早かったらしい。久仁子は時々、夫の自慢話をきかされたが、ゴルフにはまるで知識がないので具体的にはわからない。ゴルフ道具もまだ揃ってなく、近くの従兄のを借りていた。

石川律子がやって来たのは、昼すぎであった。久仁子は襦袢おむつの洗濯を干していた。

「今、あなたのお母さまのところへお寄りして来たのよ。これ、ことづかって来たわ」
ケーキの包みであった。

「お弟子さんから沢山、もらって食べ切れないから……」

箱の中は手つかずであった。娘の好物を知っていて、母はそっくり、律子にことづけたらしい。

「商売のお世話をして頂いた上に、お昼まで御馳走になったの」

律子は、母の友達の娘であった。先日、高血圧で入院していると母が話した石川とめ子の次女である。銀座の高名な宝石店に、もう十年もつとめている。

「お母さまのお弟子さんで、この秋、結婚なさる方から、エンゲージとウェディング・リングの注文を頂いたのよ」

洒落た大型バッグからカタログを取り出した。高価な品物だけに、実物はめったに持ち歩かず、カタログで大体の話をまとめ、あらためて実物をみせるというやり方である。

カタログといっても、写真は贅沢なものでさまさまのデザインの指輪がきらびやかに並んでいる。ダイヤモンドで、ウェディング・リングとエンゲージ・リングがコンビになったものが評判がいいという。

律子のコネで買うと一割から一割五分ぐらいサービスしてくれるので、久仁子も結婚の時、浩介から結納金のかわりにもらったエンゲージ・リングは、律子を通して買った。

「母、なにしていました？」

「別に……ぼんやりしてらしたわよ。日曜日で、佐賀錦の教室もないんでしょ」

「家へ来ればいいのに……」

「あたしも、そうだったのよ、久仁子さんのところへいらっしゃらないんですかって……日曜日は浩介さんがくつろいでらっしゃるのに、邪魔しては悪いって……」

「ゴルフなのよ、朝早くから……」

「電話してあげればよかったのに……」

久仁子の家には電話がなかった。公衆電話を利用するにしても、英子をおいては外出も出来ない。

「でも、お元気で羨ましいわ。うちの母と同年ですってね。還暦のお祝い、もうなさったの」

律子の来た目的の一つはそれらしかった。

「どう……指輪でもプレゼントなさったら……」

「とても、手が出ないわ」

「真珠なら、どうかしら」

真珠のカタログをひらいた。宝石をあしらった真珠のブローチが美しい。五十万、七十万という値段である。

「リングは、そんなにお高くないのよ」

無論、高いほうはきりがなが、五、六万でも、かなり良質の真珠が買える。

「指輪なんて、するかしら……」

母が指輪をしているのを見たことがなかった。おそらく、一個も持っていないだろう。仕事をする時の母の手には、指輪は邪魔なようである。

「そりゃあ、女ですもの。おきらいな筈がないわ。今日も、私の持って行ったカタログを楽しそうにみていらっしまったもの……」

「欲しいようなことってました？」

「お勧めしたんだけど……この年になって指輪なんて、もったいないからって……」

そういう母だと思った。きものでも帯でも、ハンドバッグでも、久仁子が、あれはどうかしら、なぞと、一緒の買物の途中で勧めても、もったいないからと、あっさりき流してしまう母である。

「真珠はいいわよ。そういっちゃなんだけど、いづれ、あなたが頂いて、あなたから英子ちゃんへゆずって行けば、なによりのお形見になるじゃないの、宝石って大体がそういう性質のものなのよ」

ヨーロッパなどでは母から娘へ、娘から更にその娘へと代々、受け継がれる財産だと律子は話した。

「いづれ、お古を頂くのをあてにしてプレゼントするなんて、悪い娘ね」

苦笑しながら、久仁子は氣持が動いた。

還暦の祝いに真珠の指輪なぞはたしかに氣がきいている。六十になるまで、ちゃんとした指輪一つ持っていない母が不慙でもあった。